マリ共和国を訪ねて

マリ共和国地下水開発計画調査

石井武政（環境地質部）

はじめに

国際協力事業団（JICA）は　マリ政府から要請のあった同国北東部の地下水探査・開発の事前調査のために1978年3月中旬より約1か月間　7名からなる調査団をマリへ派遣した．　私はこの調査団の一員として　マリの一端を垣間みる機会を得た．　調査に関わる報告書は国際協力事業団より公表される予定であるが　これとは別に旅行中の日記をもとにして　別な角度からこの調査旅行の概要を述べることにしたい．

マリ――正確にはマリ共和国――は　これまであまり日本になじみのなかったアフリカ大陸西部の内陸国であるが　近年　動力炉・核燃料開発事業団のウラン探鉱が開始されるに及んで　急速に　両国の関係は深まりつつある．　1960年に　フランス領から独立したこの国はサハラ沙漠の南西端に位置し　面積約124万km²を有する．　人口は　現在　約630万人と推定されている．国土の3分の2ほどが乾燥ないし極乾燥地域に含まれマリ政府にとっても　遊牧民にとっても　その沙漠地域をいかに克服するかということが宿命的課題となっている．

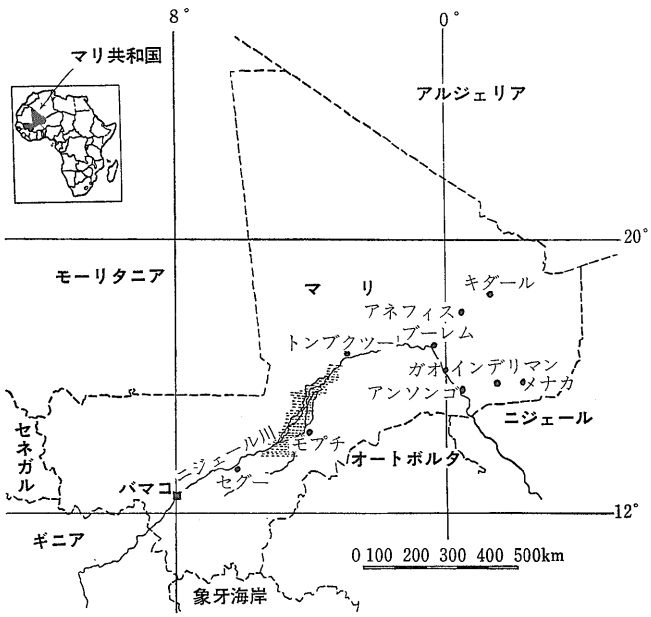

図1　マリ共和国位置図

1　調査団一路アフリカへ

日本から西アフリカの諸国へ向かうには　パリかロンドンを経由して行くのが最も便利なようである．　かつて西欧の列強の植民地支配下にあった国々は　独立後の現在も旧宗主国と親密な関係にあり　それぞれに大使を派遣しているのでビザも取りやすい．

調査団が第一歩を印したアフリカの国は　大陸西端のセネガルである（3月16日）．　セネガルの首都ダカールにはマリも兼轄する日本大使館がある．　パリではコートの襟をたてマフラーを巻いていた我々は　ここで直ちに夏服に着がえねばならなかった．　パリからリヨン経由で約8時間　ダカールのイヨフ国際空港に午前1時半に降りた我々は　旅の疲れというよりも　大西洋から吹いてくる湿った暖かい風の中で　いよいよこれからという緊張感に満ちていた．　私は「いよいよこれからという緊張感」がその後もずっと続くことを予感もせずに……．

国外への旅が初めての私が　異国では自分が外国人であるのだという　極めて簡単なことに驚いたのは　ダカールに着いてからだった．　ダカールに住むウオロフ人は背が高く　アフリカ人の中では一番真ッ黒なのだという話しも聞いた．　暑さのせいではないのだろうが　彼らは極めてゆっくり歩く．　いや実際はそう見えるだけであって　足の長い彼らの歩速は　チョコマカと歩く日本人と大して変わらないのだが……．

海岸通りを走る道路から見た大西洋は素晴らしい．　その大西洋の中　ダカール港の沖合に　奴隷の島として知られるゴレ島が浮かんでいる．　ゴレ島は　日本で言えばそれこそ「ノーモア　ヒロシマ　アンド　ナガサキ」という言葉に値する程の悲惨な歴史を秘めている．　黒人達にとっては　まさに「ノーモア　ゴレ」なのである．　奴隷貿易の名残りをとどめるこの島は　言わば　ルーツ中のルーツなのであって　島の戦略的位置の重要性から繰り返された争奪戦と相俟って　ゴレ島

にはアフリカの歴史の縮図を見る想いがする．　美しい大西洋を背景としているだけに　余計　感傷的な気持ちになる．

ダカールでは内田大使を始め大使館の人達にたいへんお世話になった．　マリでの仕事の打ち合わせの他に西アフリカでの生活の知恵などを教えていただいた．

2　マリへ飛びたつ

ダカールで2泊過ごした我々調査団一行は　3月17日夕方　マリ航空にて　マリの首都バマコへ向かう．　パリからダカールへの空路もそうであったが　今回もまた夜間飛行である．　とは言っても　ダカール～バマコ間は約 1,300km の距離　福岡～青森間程度であり　飛行時間も僅か1時間半である．　私は飛行機の窓外に初めてみる沙漠の景色を期待していたのだが　ダカールを発ってしばらく後に　地上の景観は深く夕闇の中に消えてしまった．

バマコ空港では　マリ政府の若い官史達が迎えてくれた．　さっそくマリ国内におけるスケジュールの説明と打ち合わせである．　ぎっしりと詰まった予定表には彼らの我々調査団に対する強い期待感が込められている．私はまたしても　いよいよこれから本格的な仕事が始まるのだなという　緊張感に捕えられた．

マリ政府の計らいで入国の手続きを簡単に済ませた我々は　差し回しの車で宿舎へ向かう．　気温は高いのだろうが　乾いた風が車の窓からたたきつけるように入ってくる．　運転手は夜の道を猛スピードで飛ばしているのだ（マリ滞在中　我々はこの猛スピードに毎日のように耐えなければならなかった）．最初に不思議だなと思ったことは　自動車のヘッドライトが全てフォッグランプのように　まぶしく黄色に光っていることである．砂嵐が起こった時などには　きっと白色光よりも黄色光のほうが良いのだろうと　勝手に推察した．

案内されたホテルは　ラミティエホテルという場違いといえるようなデラックスな建物で　エジプトの援助で建設された高層ビルである．　バマコ市内で　高層と呼べるビルはこのホテルしかない．　バマコを訪れる旅行

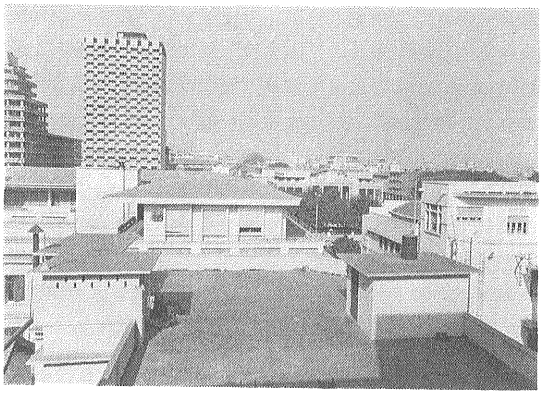

写真1　ホテル　クロワ・ド・シュドよりダカール市内．　高層ビルも見える

写真2　在セネガル日本大使公邸．　通称大使館通りと呼ばれる一画にあり　各国の大使公邸が集まっている．　外国で日本国旗を見ると　ホッとするのは私だけだろうか．

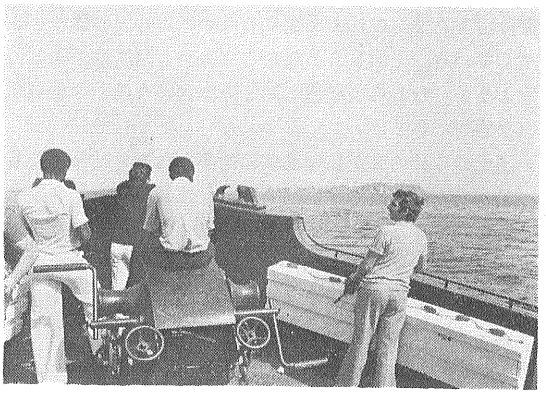

写真3　ダカール港沖のゴレ島．　定期船が就航している．

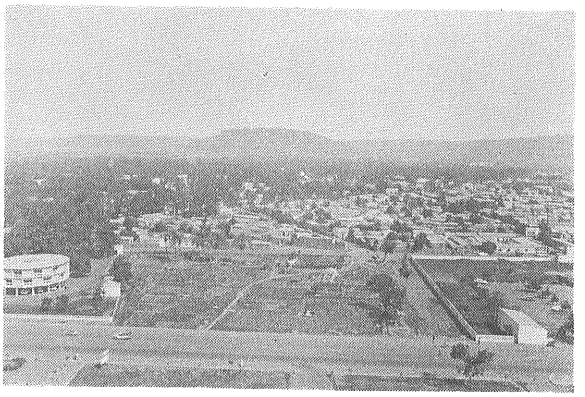

写真4　ホテル　ラミティエよりバマコ市内．　遠方の丘の上にはマリ政府の中央官庁が集まっている．

表1　　マリ各地及び東京の気温・湿度・降水量

事項	地名＼月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
月平均気温℃	バマコ	22.5	28.0	30.9	32.4	31.9	29.1	26.9	26.0	26.6	27.8	27.2	25.4	28.1
	トンブクツー	22.6	25.4	28.5	31.8	34.3	33.0	31.5	29.1	31.2	31.7	28.3	22.8	29.3
	キダール	19.5	23.1	26.7	30.6	33.4	34.2	32.8	31.1	31.1	30.3	26.7	20.6	28.4
	東京	4.1	4.8	7.9	13.5	18.0	21.3	25.2	26.7	23.0	16.9	11.7	6.6	15.0
月平均湿度%	バマコ	28	24	25	34	51	68	77	81	79	69	51	36	52
	トンブクツー	27	23	22	20	27	40	55	65	57	35	28	30	31
	キダール	24	22	21	21	23	36	46	55	44	26	27	28	36
	東京	57	57	61	66	71	77	79	77	77	74	68	62	69
月降水量mm	バマコ	1	0	3	15	60	145	251	334	220	58	12	0	1,099
	トンブクツー	0	0	0	1	3	19	65	95	37	5	0	0	225
	キダール	0	1	0	1	4	8	38	51	28	1	0	0	132
	東京	49	65	98	122	145	192	140	153	182	203	96	58	1,503

理科年表（昭和53年）による

バマコ　トンブクツーでは　年に2度　気温のピークが現れる．　降水量の分布では　雨期と乾期が非常に明瞭であるが　毎年この表のように降るわけではない．

客の数に比べて大きすぎるこのホテル　以前は　立ち腐れの状態だったそうであるが　今はフランス人の指導の下に立派に営業している．

入国は至極簡単であったが　ホテルでのチェックインが面倒である．　姓名・国籍などを記入するのはもっともなことであるが　フロントから渡されたカードを見ると　そこには　どこから来てどこへ行くのか　入国の目的は　両親の名前は　などとこと細かに書きこまなければならない．　日本の役所の窓口でさえ　こんなにうるさいところはないだろう．

この辺で　読者の理解を助けるためにマリの概要を紹介することにしよう．

写真5　マリの女性達．　たいていの物は頭へ乗せて運ぶ．

マリはセネガル　ギニア　象牙海岸　オートボルタ　ニジェール　アルジェリア　モーリタニアの7か国に囲まれた内陸国である．　国土は西経12°から東経4°　北緯11°から24°にわたっており　面積は日本の約3.5倍である．　残念なことは　その広い面積にもかかわらず国土の北側3分の2が乾いているということである．　乾燥地域の人口密度は　僅か0.8人しかない．　ここでいう乾燥地域とは　統計上　年間平均降雨量が300mm以下の地域を指している．

就業人口のうち90%は第1次産業に従事しているが　その国民総生産に対する比率は36%でしかない．

1960年の独立以来　マリ政府は国内の産業の振興と経済の発展に力を注いでいるが　1962年にフランスからの経済的自立を図って以来　恒常的な負債に悩まされている．　この状態から脱出すべく　マリ政府は経済社会開発計画を立て　これを推進するために諸外国の援助を要請している．　何事もこれからであり　発展途上国というよりも　むしろ発展開始国であるというのが　私の正直な感想である．

国土の3分の2が乾燥地域に含められるとは言ってもニジェール川以南の地域は降雨量も比較的多く　農業生産に適している．　ニジェール川沿いのモプチでは　そこの内陸デルタ地帯で稲作も行われている．　またマリ西部から東に流れるアフリカ第三の大河ニジェール川は漁業・水運・灌漑など　水資源としての重要な役割を果たしている．

図2　マリ中央銀行発行5,000マリフラン紙幣　日本円で2,500円に相当する．　左は表　右は裏　原寸は　天地10.1cm　左右　15.7cm大である．

3　マリの盛衰と大帝国

西アフリカの歴史を語るには　このマリを舞台として興亡した大帝国の盛衰を見逃がすわけにはいかない．マリは　紀元7世紀から16世紀まで続いた一連の黒人国家の中心なのである．　以下　Moore (1969) と本城 (1975) を参照しながらマリの歴史をひもといてみよう．

紀元7世紀　最初の帝国ガーナが勃興した．　ガーナはニジェール川上流域を統治し　11世紀ころまで　サハラの奴隷と金・岩塩を支配していた．

マリ帝国は13世紀に興り　ニジェール川沿いのセグー北東方に首都を置いた．　まもなくマリは黒人帝国中最大のものとなり　特にサウンディアータの統治の下で歴史上世界最大の帝国のひとつとなったのである．　マリ帝国は　14世紀末　次のソンガイ帝国に滅ぼされた．

ソンガイ帝国はガオ帝国とも言い　マリ帝国の東方に位置し　ガオが首都であった．　ガオの町の歴史そのものは7世紀まで遡ることができるが　とりわけソンガイのアスキア王統治下に最も繁栄した．　現在　ガオの町にはアスキア王の墓といわれるモスクが残っている．

これらの大帝国は　北の地中海世界と南のギニア湾周辺を結ぶサハラ交易によって　漠大な利益をあげていた．サハラの岩塩と　ニジェール川上流から産出した金　ギニア方面からの象牙などを中継したトンブクツーの町は「黄金の都」と呼ばれ　現在でもその幻を求めてやって来る旅行客が多いという．

1591年　ソンガイ帝国はモロッコ人の侵入により滅亡したが　モロッコ人は広い地域を支配し切れずに　その後は多くの小国家が乱立してしまった．

19世紀中頃から　フランスによる植民地化政策が始まった．　この時代　エル・ハジ・オマールとサモリーを先頭にして　激しい抵抗運動が続けられたが　1895年フランスはそれを鎮圧し　現在マリと呼ばれる地域にスーダンという植民地を作りあげたのだった．　英雄と称えられるサモリーを歌ったレコードを　我々はマリ滞在中に聞くことができた．

第2次大戦後　フランス共同体に加えられたが　多くのアフリカ諸国が独立を勝ち取る中で　マリも1960年9月22日　モディボ・ケイタ初代大統領を迎えて　マリ共和国が誕生したのである．

4　バマコでの生活とマリ人

バマコは比較的緑の多い町であるが　何故か茶かっ色にくすんだ空気がある．　人口は20万人程と言われる．平均寿命が短いせいもあるのだろうが　町には若い人達が溢れている．　考えてみれば　面会したマリ政府関係機関の行政官も研究者・技術者も　ほとんど若い人達ばかりであった．

かつては大帝国として　繁栄を欲しいままにしていたマリも　現在は　バングラデシュ　ラオスと並んで　世界で最も貧しい国のひとつとして数えられるようになってしまった．　物価は安いと言っても　国民ひとりあたりの年収は約2万円（マリの通貨単位は　マリフランで　1マリフラン≒0.5円に相当する.）なのである．　一泊5,000～8,000円も出して　グランホテルやラミティエホテルに投宿する旅行客を　彼らはどんな目で見ているのだろう．

しかし　それは恐らく杞憂であるということが　次第にわかってきた．　マリ人達は実に陽気で素朴である．大帝国の末裔であることを自負しているかのようにも見える．　何の屈託もないのだろうか．

バマコ滞在中に　国際協力局に勤めるフォファナさんの家庭に　晩御飯を招待されたことがある．　弁護士をしている父親を持つフォファナさん一家は大家族である．フォファナさんの父親は奥さんが3人　子供が15人もいるのだ．　回教徒が全人口の90％を占めるマリでは　男性は4人まで妻を迎えることができる．　羨しいと思われる読者がいるかもしれないが　実は大変なことである．子供がある程度大きくなれば　彼らは彼らの職業を見つ

けるが　それまでは父親ひとりの収入に頼らなければならない．　そしてそれ以上に大変なことは　ひとりの男が４人もの女性を独占できるという当然の結果として奥さんを持てない男が多数出現してしまうことである．これは社会問題だろうと思ってある青年に尋ねてみた．答えは以外と単純明快であった．　「妻を持てない男はだらしがないのである」

夕食ではディトゥというアフリカ料理を食べさせてくれた．　ディトゥは稗か粟をつぶして団子のように練り固めたもので　羊の肉やスパイスで味つけしたスープをかけて食べる．　なかなか美味しいので　セボン・セボン（うまい）と言っているうちに　とうとう各自の大皿に大盛のディトゥが配られた．　日本人の義理と人情で全部平らげようと試みたが　招待された我々の中で皿を綺麗にしたのは唯ひとりである．　ディトゥで満腹になった我々の前には　まだまだ料理が運ばれてきた．

食事中　いや我々がフォファナさんの家に着いた時からずっと　５～６人の女性がダンスを踊っていた．　皆フォファナさんの姉妹である．　アフリカンダンスとでもいおうか　非常にリズム感のよい彼女らは　頭から爪先まで全身これ踊りそのものである．　オジャラ・ンォジャラ(よう　うまいぞ　ブラボー)．　いつの間にか我々も　ディトゥを消化させるために　魅惑的な彼女らの踊りの輪の中に引き込まれていった．

バマコに住むマリ人は　バンバラ族の人が多いようである．　次の言葉（バンバラ語）を覚えているだけでも彼らとの接触のきっかけを作るのに極めて便利である．

イニソコマ　（お早よう）
ヘラキレナ　（今日わ）
アンターレ　（さようなら）
イニチェー　（ありがとう）

そしてもうひとつ便利　というよりも重要なことで是非身につけておいた方がよいのは空手である．　何も有段者にならなくてもよいから　空手の型か真似が出来るとよい．　バマコの町では　空手（正確には中国流カンフーであるが）の映画が大流行である．　顔見知りになった運転手は　「ボンジュール」の代わりに　必ず「ジャポン　カンフー」と言って語りかけてきた．　握手をして　空手の真似事の動作をすると　運転手はたちまち逃げ出してしまう．　東洋人の空手は恐ろしい存在なのである．　空手のかの字も知らない私は　マリ滞在中ずっと　「マリのブルース・リー」で通させてもらった．

5　経度0°の町ガオは水不足だった

——バマコからガオ——

マリ政府から　地下水開発の要請のあったマリ北東部（マリでは第７経済区という）を実地に調査するため我々調査団は　３月23日　ガオへ向かった．　前日　我々はバマコで　缶詰やエビアン水の調達をした．　ガオをベースにしてマリ北東部を調査するには　沙漠中のキャンプ生活が余儀なくされるからである．

３月23日　予定通りマリ航空の国内用小型機が飛ぶものと思っていたら　大間違いである．　飛行機がないという．　さあ業務調整担当の佐藤さん（JICA）は大忙しである．　我々調査団の世話をしてくれるジャキテ氏（国際協力局）とともに　別の小型機をチャーターするために　急遽マリ航空へ交渉に行かねばならなかったのである．

チャーター機は双発の20人乗りくらいの大きさで　エンジンテストをしているが　見るからに前途多難を思わせる．　後でわかったことだが　マリ航空には全部で８機しか飛行機がないという．　そのうちの５機を国際線に　残り３機を国内線に使うのだそうだ．

チャーター機とは言葉を変えれば　いくら小型であっても　我々の特別機であるはずである．　ところが搭乗を開始すると　他の旅行客も乗ってくる．　この飛行機を逃がせば　次の便が出るまで　５日間程は待たなければならないのである．　チャーター便は　たちまちにして　臨時便になってしまった．　マリでのフライトプランは乗ってみるまで　いや離陸してみるまでわからない．

沙漠地へ向かう飛行機は早朝に飛び立つ．　日が高くなれば　乱気流が発生してくるからだ．　臨時便に変身した双発機は　最初の予定通り　モプチとトンブクツーを経由して　およそ４時間後にガオへ着陸した．　ガオへ着陸した直後　双発機はエンジントラブルを起こした．バマコの空港で予感した「前途多難」が　もし空中であったらと思うと　背筋が寒くなってしまった．

ガオ空港には動燃（動力炉・核燃料開発事業団）の人達が出迎えてくれた．　動燃は1974年マリ北東部のキダール地区に鉱区を取得して以来　ウランの探査活動を続けている．　ガオでもその後のキャンプでも　動燃の人達には大変にお世話になった．　動燃の事務所がガオにあるおかげで　ジャポンはガオ中に知れ渡っている．ここでも我々は「ジャポン　カラテ」と呼びかけられた．

ソンガイ帝国の古都ガオは　整然と格子状に道路が走るが　緑が少ないので　赤茶けた大きな田舎町といった感じである．　ホテルは国営のアトランティドしかない．

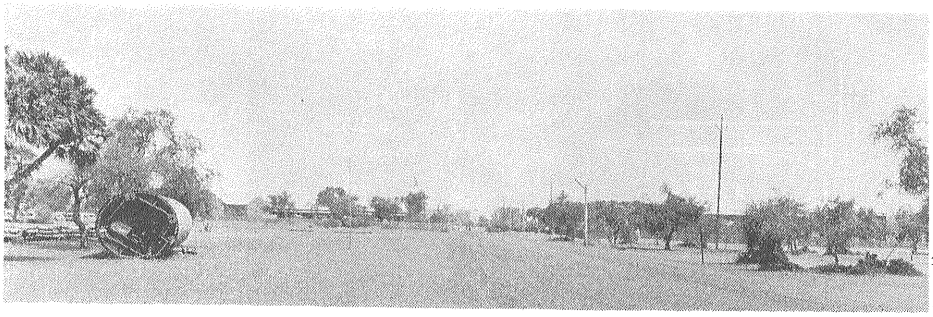

写真6
ガオの町には広い道路が走る.

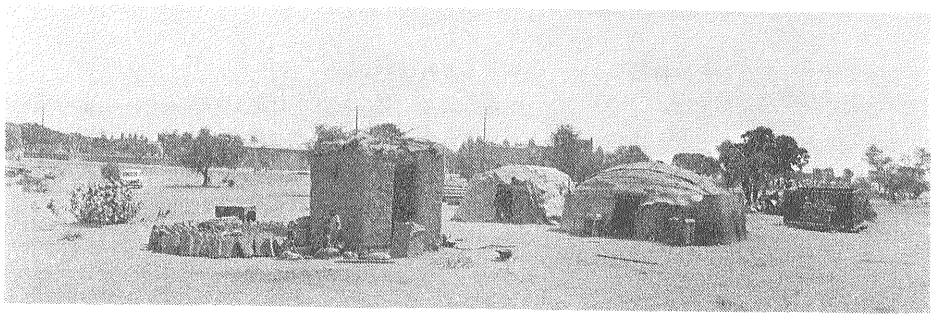

写真7
ガオの町に〝侵入〟してきた遊牧民の家.

ラミティエホテルに比べれば外見はずっと貧弱であるが民家が泥の家であるだけに　それでもかなり立派に見える.　ガオでの生活は　アトランティドの話しに尽きる.

まずこのホテルにはサソリが棲息している.　ある日の明け方　寝苦しくて（毎夜暑くて寝苦しいのだが）目を覚ますと　ベッドの下から　何やらどこかで見たことのあるようなものが這っている.　実物を見たのはもちろん初めてであったが　それは明らかに星占いに出てくる蠍座の絵そのものである.　同室の佐藤さんに夢中で声を掛ける.　サソリは私のベッドの下から佐藤さんのベッドの方へ前進しているのだ.　二人でその体長5cm程の節足動物がサソリであることを確認しあうと　私は咄嗟に皮靴で　思い切り引っぱたいた.

翌日　動燃の人にサソリの一件をさも誇らしげに話すと〝殺したなんてもったいない　あんなもの箸でつまんでビンに入れて　お土産にしなきゃいけないよ〟なんて言われてしまった.　サソリ酒を造るわけでもあるまいし　私は必死だったんだから.　なお　当地にはサソリが２種類いて　ひとつは黒っぽいたくましいやつ　もうひとつはもやしのような白っぽい弱々しいやつだそうだ.私が潰したのは　もやしの方である.　動燃の人は話を続けて　〝サソリに刺されてもまあ死ぬことはない　せいぜい大型の百足にやられたくらいだと思えばよい〟.私は百足も嫌なので　それから後は　靴をはく時には必ず　執拗(しつよう)に逆さに振り続けたのである.

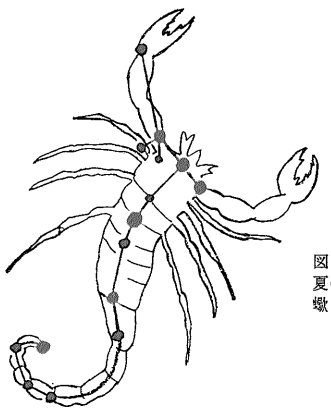

図3
夏の星座
蠍　座

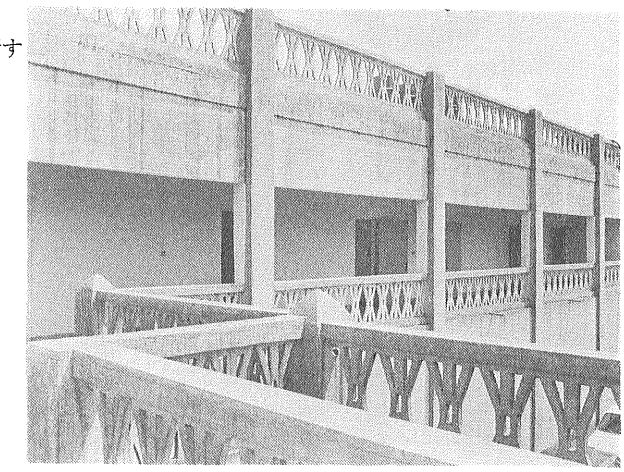

写真8　ホテル　アトランティド.　日中はとてもこのホテルの中には居られない.

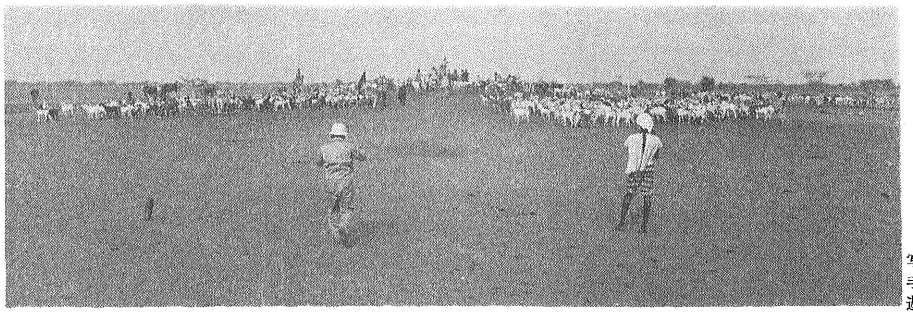

写真9
手掘りの井戸に群がる動物達と遊牧民.

ホテルアトランティドでの生活で　もうひとつ特筆しなければならないことは　このホテルは水が出ないということである.　各室にはちゃんと水道とシャワーの設備がある.　しかし水が出ない.　蛇口を開けっぱなしにしておいてたまに気前よく出始めても30分と続かない.毎朝ホテルのおじさんが中庭の井戸からバケツ一杯（約15リットル）の水を各宿泊客に運んで来る.　そのバケツ一杯の水が我々の一日の全てである.　とても飲めそうな水ではないので　顔と体を洗い　洗濯をし　そして最後にはトイレの用足しに使う.　水というもの節約すれば結構使えるものだが　こんなに貴重なものだと思ったことはこれまでなかった.

6　White Sun for Black People

——ガオからブーレム——

ガオでひととうりの情報収集と打ち合わせを終えた我々は　3月27日早朝　4台のジープを連らねて　ガオ以北の沙漠地域を実地調査するため出発した.　日中は気温がかなり上昇するので　明け方の涼しいうちに　出来るだけ距離をかせがなければならない.　ジープは無線機を備え　タイヤその他に　沙漠環境に適応するような仕様が施されている.

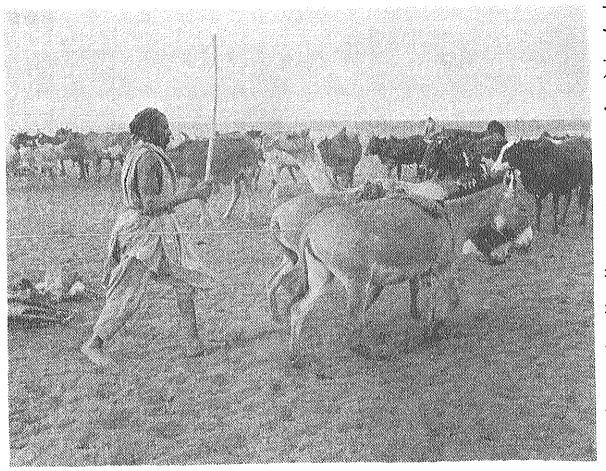

写真10　二頭だてのロバがツルベのついたロープを引く.　ロバはこの作業を何回も何回も繰り返す.

午前5時半　北へ向けて行進が始まった.　東の空が次第に白んでくる.　乾期の今頃は毎日晴れ（酷暑）に決まっている.　ただ四方の地平線付近が少し霞んでいる.　未明の涼しさ（と言っても既に30°C近くあるのだが）の中を　快調にジープは走る.　突然　歓声があがった.　日の出だ.　白い太陽が上る.　日本で見るような朝焼けの赤に染まった日の出ではない.　沙漠地域の現地踏査の間　我々の渉外を引き受けてくれた国際協力局のシソコ氏が静かに語りかける.　"White Sun for Black People".　白と黒の対比の中に　シソコ氏は何を見ているのだろう.　私も繰り返した.　"White Sun for Black People."

白い大陽を見ながら　我々のジープは　沙漠の中に掘られた手掘りの井戸に近づく.　無数の羊が群がり　その回りに痩せこけた牛とロバがいる.　遊牧民の朝は早い.　トアレグ族なのだろう　目鼻立ちの整った茶褐色の肌と顔　精悍である.　我々を訝かしく見ていた彼らも　カメラを向けると微笑んでいる.　直径1.5mくらい　深さ数10mの井戸に滑車をつけ　皮袋のツルベを投げこみ　それをロバやラクダが引き上げる.　ラクダの上には誇らしげに少年がひとり.　ラクダの歩く距離すなわちツルベを引き上げるロープの長さを計れば　井戸の深さ（正確には水面までの深さ）がわかる.　50m以上はあるだろう.　ロバとラクダと少年は　その単調な道のりを日に何往復するのだろうか.

皮袋の中から少し濁った水が　大きなタライに注がれた.　羊は順番に水を飲んでいく.　無数にいる羊なのに　決して割り込もうとはしない.　前足を折り曲げて行儀よく飲むその姿は　不思議な感動すら与える.　沙漠の中の手掘りの井戸は決して水量が豊かではない.
旱ばつの年には涸れてしまうだろうとさえ言われている.羊達はその沙漠の中での乏しい水が　彼らにも　そして飼主にも非常に貴重なものであることを知っているかのようだ.

午前10時ころから急に気温が上がる．　水銀柱は既に体温を上回っている．　詩的な白い太陽は　もはや灼熱の悪魔だ．　風が熱い．　まばらな植物が喘(あえ)いでいる．ターバンを巻きつけた運転手は　咳ばらいもせずに前方を注視している．　轍のついた道を　草原の中を　トゲの生えた植物の脇を　砂礫の中を　ジープは突走る．ふと　サハラで息絶えたという青年の物語りを思い出す．青年は一頭のラクダに食糧と水を載せ　サハラ単独横断を企てた．　サハラ沙漠は東西 5,000km もある世界一の沙漠だ．　サハラに憑かれた青年は既に縦断には成功していた．　メナカを出発した青年は東へ東へと進んだ．毎日毎夜　青年は何を考えていたのだろう　一頭のラクダとともに．　熱砂の昼と星影の夜　その繰り返しの中で青年はメナカから 130km 程東へ到達していた．　しかし青年の命綱　たった一頭のラクダが何処かへ逃げてしまった．　サハラに取りつかれた青年はサハラの入口で息絶える他なかった．　青年の遺骸の回りには彼の足跡が無数に残っていたという　ラクダを探し回っていたのだろう．　22才の若さであった．　実話である．　青年の名は上温湯隆(かみおんゆたかし)君という．

途中　井戸に立ち寄るために車を停めても日蔭がない．緯度の低いこの付近では　正午には太陽はほとんど真上から照りつける．　車に積み込んだ水を飲んでも湯のように熱く　すぐに発汗してしまう．　マリ人からもらった干しナツメの実をかじっても　ほとんど甘さを感じない．　惰性と苛立たしさの中でジープは北上し　正午にブーレムに着いた．　沙漠行初日の強行軍を終えて　日本人は皆　意志のない顔をしていた．　こんなトリップが明日も明後日も続くのか．

写真12　沙漠を走り続けて調子悪くなったランドローバーを点検する．車の故障は我々の生命につながっている．

7　沙漠に出現した町　動燃キダールキャンプ　——ブーレムからキダール——

ブーレムはガオ北方約100km　ニジェール河畔の小さな町である．　ブーレムの市庁舎に辿り着いた我々調査団一行は　そこでお祭りに遭遇した．　炎天下の市庁舎前庭で　一弦のチェロのような楽器の音色と　ブーブーという民族衣装に着飾った人々の拍子が単調なリズムを乾いた空間に響かせている．　今日は何の記念日なんだろうか．

シソコ氏と坊城団長を先頭に市庁舎に近づくと　音楽は高まり　さらに人々の歓声まで加わった．　これはお祭りではない．　我々を歓迎するセレモニーなのだ．我々は強い日射の中を待ち続けていたというブーレムの人々の前を　さも一国の大統領が閲兵するかのような面持ちで挨拶して回る．　急いで身嗜みだけは整えるがジープで揺られ続けた顔の表情だけは隠せなかった．

厚い土壁の市庁舎の中で　簡単な歓迎式が行われた．

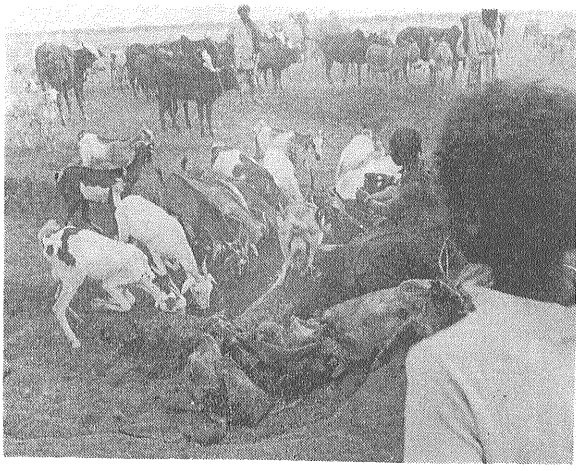

写真11　汲み上げられた水に集まる羊．　順番に行儀よく飲んでいく．

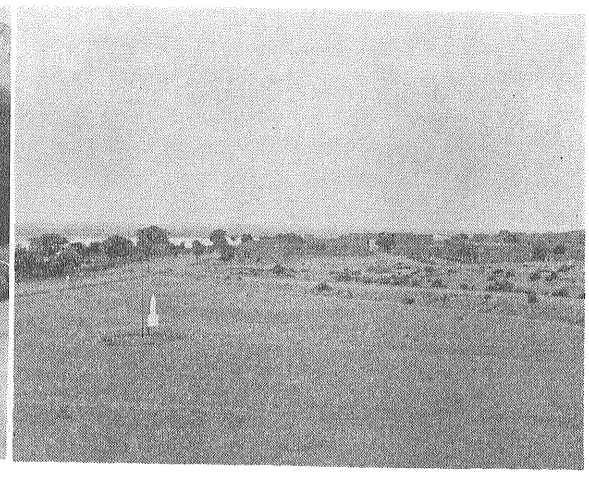

写真13　ブーレムの町とニジェール川．　レンガのように固めた泥で家を作る．　左の白い塔はフランスからの独立を記念した碑である．

我々日本人調査団の行動は　毎日のようにラジオが知らせているというし　世話役のシソコ氏の手回しの良さには感心する．　ブーレムの町の持てなしは　もし我々が全員元気だったら　それこそ嬉しい悲鳴を上げたであろうが　まず「飲みなさい」と言って差し出されたのが井戸水とジョニ赤である．　こんな田舎町にスコッチウィスキーがあるのかと目だけは喜んだが　何しろ 40°C を越すような大気の中で　ストレートに飲むわけにはいかない．　かと言って異国の生水にひどい恐怖心を抱いていた私は　井戸水を注がれたコップにも手が延びない．市庁舎に集まったブーレムのお歴々は我々の表情を窺い動作を見つめている．　私は決意した．　エイこれも国際親善だ　ウィスキーを舐めてから　コップを一息にあおった．　喉を火照らせた酒精を　次に井戸水が薄めていく．　井戸水にたとえ亜硝酸イオンやアンモニアイオンが含まれていようと　この暑さの中では　きっと汗になってくれるだろうと信じて．

晩餐会の後　タムタムという民族舞踊を披露すると言われたが　初めての沙漠の一夜を迎えて　肉体的にも精神的にも疲れ切っていた我々は　とうとう中途で抜け出してしまった．　私の国際親善もウィスキーと水しか飲めず　もっと体力と気力があればと申し訳なくなった．夜露の下りない公舎屋上で横になると　私は深い眠りに落ちていった．

翌日　ブーレムを出発した我々は　相変わらず井戸の視察と岩石の採集を続け　水銀柱の高さに驚きながら東方へ進路を取った．　アネフィスという軍隊の町で一泊し　3月29日　キダールへ向かう．　ジープの振動で内臓が捻転しないように腹巻をきつく締め　口鼻から出来るだけ水分が逃げないようにタオルで覆う．　座席にへばり着いた背中と腰は　汗で濡れている．

キダールの町は軍事的要衝の地である．　プレカンブリアンの花崗岩・片麻岩の岩肌が　或いは丸く　或いは鋸歯状に尖った地形を呈するようになると　目的地は近い．　見たこともない景色なので盛んにカメラのシヤッターを切ろうとすると　隣りのマリ人が叫ぶ．　ノーセパボン．　彼は両腕を胸元で交差させ　ペケ（×）印を作っている．　どうやら軍事基地が近いので　写真撮影は駄目だと言っているらしい．　もともとマリ国内では　撮影許可証を公安警察本部から発行してもらわないと写真を撮ることができない．　しかも　飛行場と軍事施設は　許可証があっても撮影してはならない．　許可証なしに　或いはこっそりと軍事施設を写しているのが見つかったら　それだけで宰屋にぶち込まれるという物騒な話も聞いた．　我々は全員カメラを仕舞うことにした．　日本はそれに比べたら写真家天国である．

キダールのコマンダントに挨拶の後　動燃キダールキャンプに向かう．　将来にわたって海外のウラン資源に頼らなければならない日本としては　動燃のマリにおける探査活動は重要である．　マリ北東部に獲得した日本の本州にほぼ相当する面積の鉱区は　マリ政府より要請のあった地下水開発の対象地域におよそ匹敵する．　マリ北東部は今や　ジャパンエリアと呼ばれているくらいである．

キダールから北方約 7 km に進むと　忽然と動燃キャンプが現われた．　タンク車が 3 輌　オフィスが 1 棟　テントが数10張り見える．　我々調査団にとって　動燃の施設・設備・運営法などを知ることは　今後の同地方での地下水開発におけるロジスティクスの検討に　格好の具体例となる．　我々が訪れた 3 月末には　動燃の隊

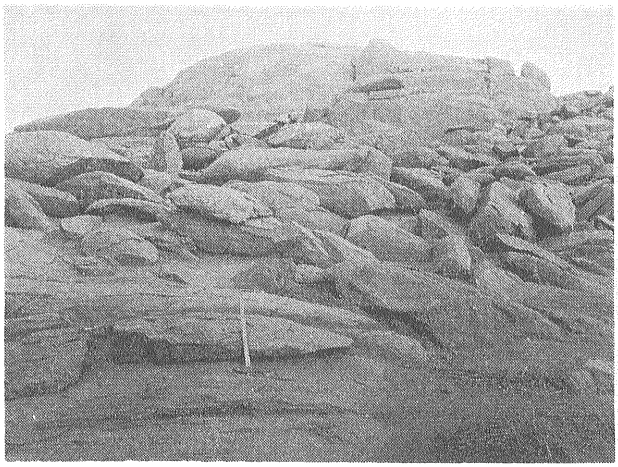

写真14　アネフィスからキダールへ向かう途上での片麻岩の露頭．　丸味を帯びた風化をしている．

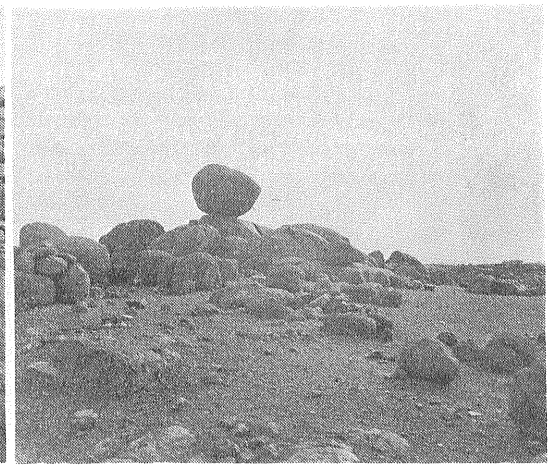

写真15　奈良の石舞台古墳を思わせる花コウ岩の露頭．　キダールにて．

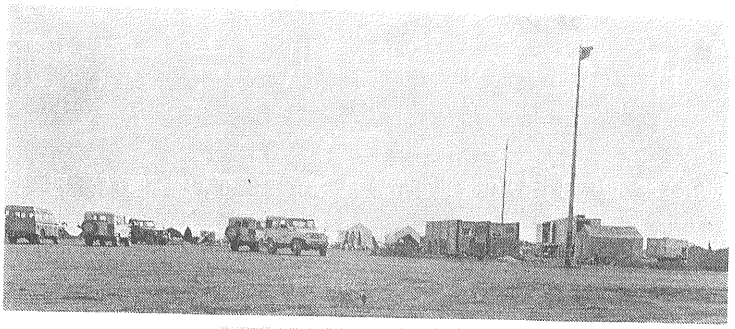

写真17
沙漠の〝町〟動燃キダールキャンプ.

写真16
動燃キダールキャンプはテント村でもある. テントには断熱のためのフライが張ってある.

員は漸次 帰国の途にあり 最盛時マリ人を含めて130人程の〝町〟を形成していたキダールキャンプも 小規模になりつつあった. マリにおける動燃の活躍の様子は坂本記者(朝日新聞)によって 詳しく紹介されているので補足する程度にとどめよう.

まず我々がキダールキャンプを訪れて嬉しかったことは オフィスにクーラーが効いていることであった. 戸外が40°C位でも室内は30°C程である. 調査団全員の顔に元気が戻る. 次に嬉しかったことは日本食を味わえたことである. そば みそ汁 漬物などには感激した. マリ到着以来 ほとんど毎日のように下痢に見舞われていた私も この時ばかりは多いに食欲が進んだ. 動燃が日本から運び込んだ資材のうち 食糧が重量にして全体の約3分の1を占めている.

その他 周到な準備のもとに用意された資器材と 現地での動燃隊員の努力により 苦しい自然環境の中での長期間にわたる生活が確保されているようである.

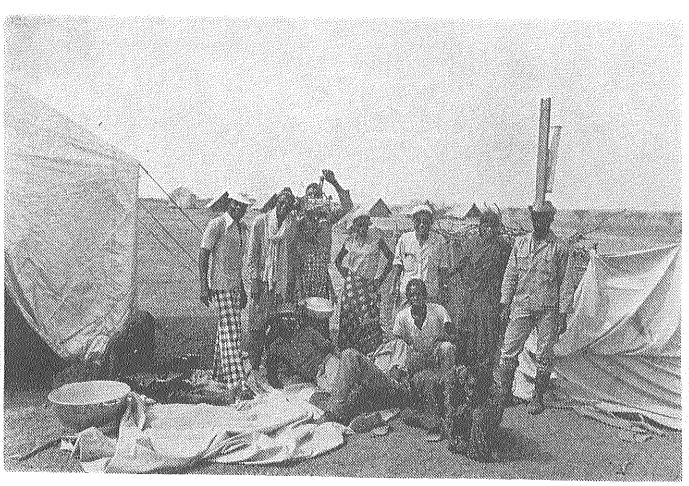

写真18 キダールキャンプで働くマリ人. (右から3番目は動燃隊員の丸山さん)

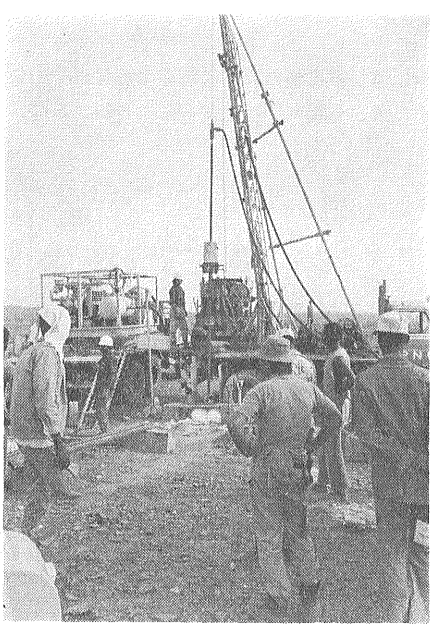

写真19 キダール鉱区におけるウラン探鉱のためのボーリング.

8 悩み多きインデリマンの朝

——ガオからインデリマン——

沙漠地域の調査はこの後　ガオ南東方のアンソンゴ　インデリマンと続くのだが　ここでは主にインデリマンでの出来事を記すことにしよう.

ガオに一旦戻った我々は　4月1日　再び実地調査に出発し　ニジェール河畔のアンソンゴを経由してインデリマンへ向かった.　ガオからジープを飛ばすこと約1時間半でアンソンゴの町へ着く.　ニジェール川がすぐ傍を流れているのに　井戸の水量が乏しいという.　川では家畜達が水を飲み　女性が洗濯をしている.　また釣をする少年がふたり.　何故かたくましい体の洗濯娘と　か細い少年の姿が対照的だ.　女性はほとんど皆原色系統の衣装を着ている.

沙漠行初日の教訓を守るため　日中の行動は出来るだけ慎しみ　アンソンゴで暫くの間休憩することにした.　確かに真昼間には　あっというまに40°C を越える気温となった.　40°C 以上の外気の中に居ることは　たとえ車を走らせ続けている時でも　相当な減退を感ずる.　3月30日にキダールからガオへ引き上げる途中は　そうした熱砂の中を走り続けたのであるが　四方に巻き上がる小さな竜巻を目にするだけでも疲労してくる.　もはや暑熱下では　日蔭でおとなしくしているのが一番である　というのが偽りのない感想である.

午後4時ごろ　気温が体温程度にまで下がるとようやく重い腰を上げて　インデリマンへ向けて出発した.　アンソンゴからインデリマンまで　ジープで約3時間とふんでいた.　しかしこれが思わぬ失敗であった.　東西に延びる道路の両側に散在する井戸や　ワジを堰き止めたダムを調べていくうちに　6時ごろには日はとっぷりと暮れてしまった.　どこをどう走っているのかわからない.　運転手の技術と勘だけが頼りである.　沙漠は平坦な所だと思われるかもしれないが　とんでもない所に崖があったりする.　また後続の車は先頭の車が巻き上げる砂埃によって視界が効かない.　運転手はライトを点滅させ　激しくギアーを入れかえている.　握り拳が汗を包む中に　前方にバスが見えてきた.　バスの周りにはかなり大きな木が生えている.　雨期には湖を形作るというインデリマンの窪地に着いたのだ.　窪地にかかる木製の橋を渡ると　午後8時を過ぎていた.　暗闇の中を飛ばして　無事故で目的地に到着できたことは運以外の何ものでもない.

バスはこれからガオへ帰る人達で溢れている.　そしてバスから少し離れて　トアレグ人が我々とバスの乗客を訝しげに見つめている.　じっと目ばたきもせずに　話声もなく.　誇り高きトアレグ族は　不意の珍入者を迷惑がっているのだろうか.

インデリマンの夜は更けていく.　インスタントの赤飯とカレーライス　マリ人から分けてもらった川魚のフライを腹に詰めこむ.　ここでも日本人の食生活の習慣が露わになる.　我々は20分そこそこで晩飯を片付けたのであるが　マリ人は陽気に食べ　食後のお茶に充分な時間をかける.　彼らの飲むお茶はマリ茶といい　それなりに作法がある.　きゅうすをブリキ製のコンロに載せ　炭火でクツクツと煮る.　きゅうすの中にはナナイエと呼ばれるお茶っぱと水が入っている.　煮つめるとグラスに注ぎ　再びきゅうすに戻す.　すなわち2度煮つめて出来上りだ.　これを小さなカップに分けて　各自に配る.　何ともいえない香りが漂い　舐めてみると甘いような渋いような不思議な味である.　甘いのは

写真20　ニジェール川で釣りを楽しむ少年.　後方に先カンブリア紀の地層が露出している(アンソンゴにて).　ニジェール川の魚はなかなか淡白で美味しい.

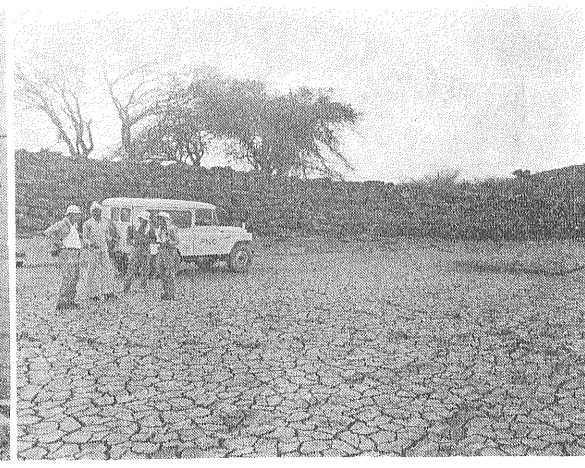

写真21　ワジを堰き止めたダム.　雨期にはかなりの水が貯るのだろう.

お茶に角砂糖やザラメを入れるからだ．　マリ人達はマリ茶を3杯飲む．　4杯以上飲むことは　いくらお茶が残っていても　贅沢なこととされているらしい．　3杯飲み終えると　お喋りの時間はお開きである．

我々が狭い砂地にマットを敷いて横になっていると何人かのマリ人がおもむろに茣蓙を引っ張り出してきた．メッカに向けて彼らのお祈りが始まるのである．　カセットテープに吹き込まれたお祈りの文句をラジカセで流し　それに合わせて独特の辞儀を繰り返す．　先刻まで陽気に喋り合っていたのに　今はまさに真剣である．日本人も一言も口を差しはさむことなく　彼らの動きを見つめる．　イスラム教は実に厳しい自然環境の中で生きている．

翌朝　目を覚ますと驚いた．　我々は遊牧民達の粗末な家の横に眠っていたのだ．　むしろのようなもので丸いテント型の家を作り　周囲にはトゲのある植物の枝などをめぐらせてある．　トアレグの女性と数人の子供達が何かを食べている．　しかし話声や物音ひとつ聞こえない．

食欲のない我々はカンパンやクラッカーで簡単な朝食を済ませ　後片付けを始めた．　散らばったジュースの空缶やビニール袋などは穴を掘って埋め　紙くずは燃やすことにした．　キダールの町で貰った貴重なトマトは車の振動でくずれてしまい　今や悪臭を放っている．私の感覚ではとても我慢できないので　これも穴に埋めることにした．　ここから悩み多きインデリマンの朝が始まった．　沙漠旅行の間ずっと我々と行動を共にしたマリ人のひとりが　その腐ったトマトをトアレグに与えると言う．　私が怪訝な顔をしているうちに　彼は口笛を吹いた．　暫くの間反応がなかったが　やがてひとりの女がジープの後ろに現われた．　女は　何だこんなものを　という表情で帰るのかと思っていたら　それを受け取り　静かに引き上げていく．　女の動きを見守っていると　やがて囲いの裏側で　子供達とトマトを食べ始めた．

遊牧民はそんなに貧しいのだろうか．　私は　ブーブーの袂に厚い札束を入れた遊牧民を　ガオで見かけたことがある．　痩せた羊でも数多く売れば　相当な現金になることは確かだろう．　では彼らの食生活が貧しいのだろうか．　実際　年間の大半を草地と水を求めて移動する遊牧民達は　物質的には恵まれていない．　我々の捨てた空缶を大事そうに持ち帰る．　私が　朝食後　穴を掘ってゴミを埋めてしまったことは　却って砂漠の仁義に反したのかもしれない．

遊牧民達は何を食べているのだろうか．　何故　過酷な自然の下で　毎日毎日数10kmも歩き続けるのだろうか．彼らは幸せなんだろうか……．　おそらくこうした疑問は日本人には解決しえないものであろう．　GNPの大きさや生活水準の高低では　人間の幸福を推し量ることはできない．　とにかく遊牧民達は　それが古来からの風習であろうと　止むを得ないことであろうと　沙漠の中で生きているのである．

やがて　悩み多きインデリマンの東方から　白い太陽が上り始めた．

9　マンゴーの雨

——あとがきに代えて——

マリ東北部および東南部の沙漠地域の調査を終えて我々は　4月5日　バマコへ戻った．　調査結果を踏まえて　再びマリ政府との打ち合わせが始まる．　マリ側の強い主張と日本側の熱気が交錯し　バマコは蒸し暑さを増してくる．

ガオから帰った我々の目には　バマコは非常に緑豊かな町に写る．　外務省の庭には　そろそろ色づき始めた実をつけるマンゴーの大木が茂っている．　4月と言えば　ガオやキダールの町では砂嵐の始まる季節だ．　そして首都バマコ周辺では　雨期の走りに入る．　ホテルから窓越しにニジェール川を眺めていると　突然　何発もの小さな花火が河畔から上がった．　目を転ずると広場に沢山の若者が集まり　ディスコ風の音楽が流れている．　陽気なマリ人達はダンスが大好きである．　毎晩のように街角のあちこちで踊っている．

マリ滞在も残り少なくなってきた．　冷房の故障したラミティエホテルの暑さの中で　遠い日本の桜の季節を思い浮かべていると　夜半になって雨が降り出した．

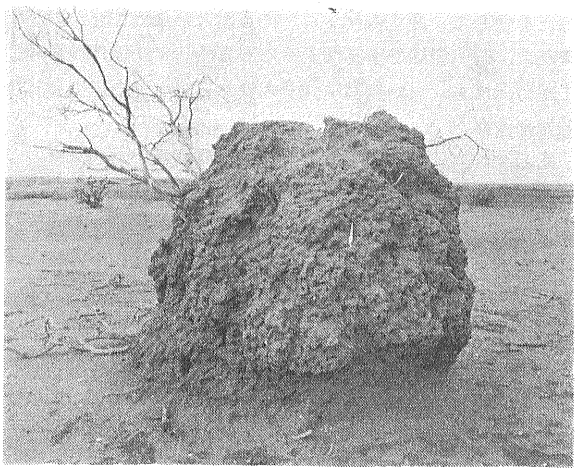

写真22　インデリマン近くに無数に見られる巨大な蟻塚．

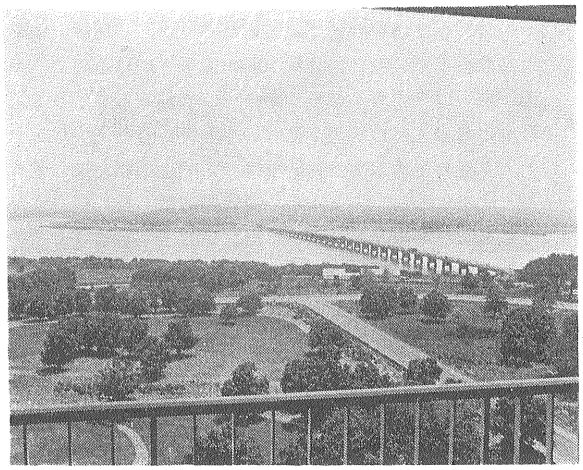

写真23　バマコ市内を流れるニジェール川とバマコ橋.

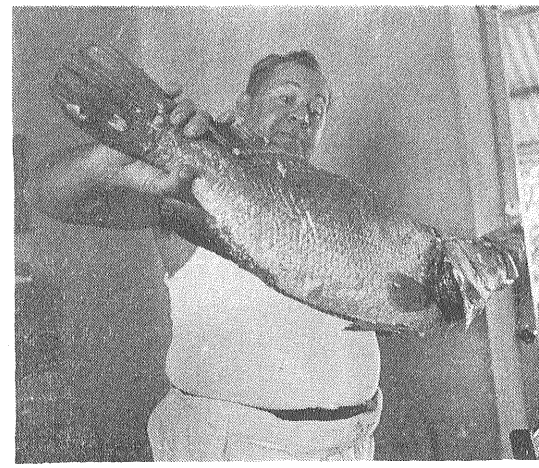

写真24　ニジェール川でとれる大きな大きな魚　キャピタン.

かなり強い雨である.　アフリカで初めて遭遇した雨だ. 広場で遅くまで続けられていたダンスも　困惑気味に終了となる.　ラミネ・ケイタ工業開発観光大臣を表敬訪問した時の大臣の言葉を思い出した.　"雨期の走りに降る雨を我々はマンゴーの雨と呼んでいます　この雨がマリに恵みを与えてくれるんです".

4月10日　いよいよマリを離れる日となった.　通訳の亀井さんを介して行われるマリ側との打ち合わせはフランス語と日本語との往来で時間がかかる.　議事録の確認は　実に　バマコ空港を飛び立つ直前まで続けられたのである.

この日は夜来の雨で明けた.　道行く人々は困った顔もせずに　雨に打たれている.　マンゴーの雨　日本で言えば菜種梅雨と言ったところだろうか.　雨の中を車を飛ばして空港へ向かう.　空港ではジャキテ氏やフォフォナさんが見送ってくれた.　マリ滞在中会議や沙漠旅行を通じて　多くのマリ人と接し知人となることが出来た.　皆　親切で率直な人々である.　マリ以外のどこへ行っても　ついに私はマリ人の悪口を言う人に出会わなかった.

もしマンゴーの雨が平等にサハラに降り続いたら　マリはもう一度　アフリカ史上に大きな足跡を残すことになるだろう.　それが物理的或いは気候学的にかなわぬことであっても　そうなるべき智恵と努力を払い　沙漠を克服していかねばなるまい.　沙漠—乾燥の世界—を克服することに　我々が小さな貢献でも果たすことができれば幸いである.　マンゴーの雨がマリに恵みを与えんことを　象牙海岸に向かう機上から願わずにはいられなかった.

参 考 文 献

赤木祥彦 (1978)：乾燥地域の地形 (一)～(六).　地理, vol. 23, no. 1～no. 6, 古今書院.

Glennie, K. W. (1970): Desert Sedimentary Environments. Developments in Sedimentology, vol. 14, 222p., Elsevier Publishing Comp.

本城靖久 (1975)：草原とタムタムの旅　西アフリカを独りゆく.　ジャパンタイムズ, 169p., 資料79p.

上温湯隆 (1975)：サハラに死す.　時事通信社, 294p.

小堀　巖 (1973)：沙漠—遺された乾燥の世界—.　NHKブックス187, 217p.

国際協力事業団 (1977)：マリ共和国経済協力調査報告書. 75p.

国際協力事業団 (印刷中)：マリ共和国地下水開発事前調査団報告書.

桑形久夫 (1977)：砂漠と水資源.　地質ニュース, no. 278, p. 42—52.

Moore, C. H. (1969): Mali. The World Book Encyclopedia, vol. 13, p. 84—86, Field Enterprises Educational Corporation.

坂本武久 (1978)：サハラに挑む—動燃ウラン調査隊—(1)～(30). 朝日新聞夕刊　昭和53年1月5日付～昭和53年2月22日付.

（追 記）

本調査団の事前調査結果を踏まえて　本年10月始より地下水開発の対象範囲などを取り決めるSW (Scope of Works) ミッションが　そして来年早々には　基本調査団が派遣されると聞いている.　基本調査団においては現場で実地に諸器材を運用し　その他の実際的な問題点を把握解決していくことになるのだろう.　海外技術協力のひとつとして　遠い異境の地において　いよいよ本格的な地下水開発調査が進められることに　今は胸はずむ思いである.